

# ポライトネス理論におけるフェイスに関する一考察

大塚 生子

## 1. はじめに

ポライトネス研究は、これまで、Brown and Levinson (1978, 1987、以下 B&L) のポライトネス理論に大きな影響を受け発展してきた。Goffman (1967) のフェイス概念を鍵概念として、話し手の発話産出の際の配慮行動の型を詳細に記述した B&L のポライトネス理論は、従来のポライトネス理論の中で最も影響力が強く、これまで B&L の理論を援用することによる実証的研究が多くの言語文化において行われてきた。

しかし近年、Eelen (2001) らにより、ポライトネス研究は実際の談話に基づいて行われるべきであり、理論に基づいた研究者の判断によるポライトネス研究では実践コミュニティの姿を説明することができないとする新たな流れが起こっている。

本稿では、今後さらに発展していくであろう Eelen らの discursive approach の手法を用いて実際の談話を分析していく際に、分析の枠組みとして取り入れることができるフェイスの捉え方を、B&L の枠組みの不足点を指摘することによって再考することを試みる。

## 2. ポライトネス研究の流れ

ポライトネスに関しては、言語表現の丁寧度に近い捉え方から語用論的捉え方までこれまでに様々なアプローチがなされてきたが、本稿では主に B&L のポライトネス理論を対象に、ポライトネス理論におけるフェイスに関する考察を進める。

### 2.1 B&L (1987) のポライトネス理論

“politeness” という語から導かれる「丁寧さ」「礼儀正しさ」という一般的意味とは異なり、B&L のポライトネス理論は「円滑な人間関係を確立・維持するための言語行動」(宇佐美, 2002: 102) と定義される、語用論の枠組みの中の概念である。

B&L は、Goffman (1967) の「face (フェイス・面子)」を基に、独自に展開させたフェイス概念を彼らのポライトネス理論の鍵概念としている。B&L によると、フェイスには相手と親しくなりたい、仲間意識を共有したいという「positive face (ポジティブ・フェイス)」と、相手から侵害されたくない、独立を保ちたいという「negative face (ネガティブ・フェイス)」の 2 種類があるという。これらのフェイスは人が普遍的に持っているものであり、相互行為の際には互いに配慮を示すものであるとされている。

しかし実際の相互行為において、これらのフェイスはしばしば脅かされる危険がある。B&Lは、フェイスを侵害したり危険にさらしたりする行為を、「FTA (face threatening acts)：フェイス侵害行為」と呼ぶ。そして、ある行為のFTAの度合いの大きさ、つまりフェイスに対する侵害の危険度の高さは、以下の3つの要因の総和によって決まるとして、「FTA 度合いの見積もり公式」を以下のように表している。

$$\text{FTA 度合いの見積もり公式：} W_x = D(S, H^1) + P(H, S) + R_x$$

$W_x$ ：ある行為  $x$  が相手のフェイスを脅かす度合い (Weight)

$D(S, H)$ ：話し手と聞き手との社会的距離 (Distance)

$P(H, S)$ ：話し手と聞き手の相対的権力 (Power)

$R_x$ ：ある行為  $x$  の、ある文化における押し付けがましさの程度の絶対的な順位付け<sup>2</sup> (Rank)

(B&L, 1987: 76; 筆者訳)

B&Lは  $W_x$  を、 $D$ 、 $P$ 、 $R$  の総和であると説明しているが、この公式は実際に何らかの具体的な数値を当てはめて計算、危険度を算出できるというものではなく、概念的なものとして捉えるべきである。そしてこの公式によって導き出されたある行為  $x$  のFTA 度合いの高さによって、話し手はそれを軽減するため以下の図の1～5のうち最も適切と思われるストラテジーを選択するとされている。以下は番号順に、発話内容のFTA 度合いが低いと見積もった場合に選択される。

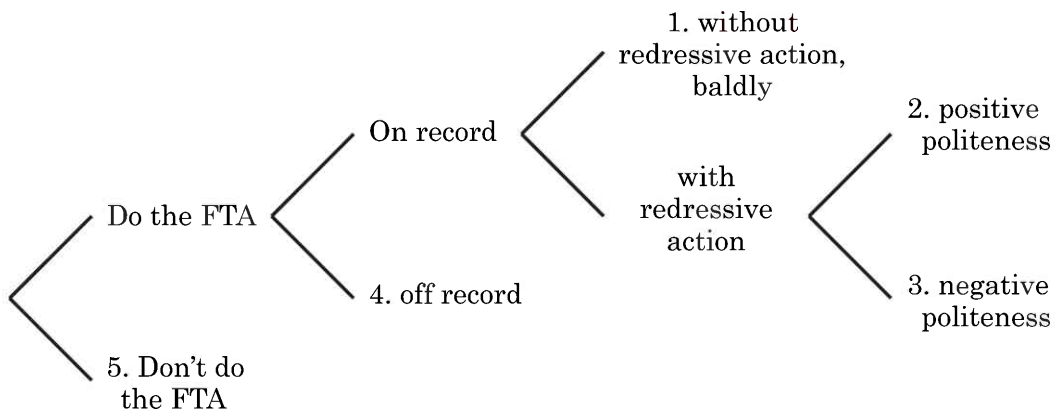


図1 Possible strategies for doing FTAs (B&L, 1987; 69)

1. 補償行為をせずあからさまに言う (without redressive action, baldly)
2. ポジティブ・ポライトネス (ポジティブ・フェイスへの配慮) (positive politeness)

3. ネガティブ・ポライトネス（ネガティブ・フェイスへの配慮）（negative politeness）
4. ほのめかして言う（off record）
5. FTA を行わない（Don't do the FTA）

ポジティブ・ポライトネスとは、聞き手のポジティブ・フェイスに向けられるものである。接近を基に（approach-based）しており、相手を同じ集団の一員、友人、あるいは好ましい人として扱うことによって、聞き手の欲求を話し手も望んでいると示すことで、相手のポジティブ・フェイスに配慮するものである（B&L, 1987; 70）。それに対しネガティブ・ポライトネスは、主に聞き手の、自分の縄張りや自己決定権を維持したいという基本的な欲求であるネガティブ・フェイスに向けられており、それを補償し、満足させようとするものである。そのため、ネガティブ・ポライトネスは本質的に忌避を基に（avoidance-based）しており、ネガティブ・ポライトネスのストラテジーは、話し手が相手のネガティブ・フェイス欲求を認識し、かつ尊重して、相手の行動を侵害しない（または、侵害を最小限にしようとする）ことを確かにすることで表現される（B&L, 1987; 70）。

このように、B&Lのポライトネス理論は、円滑なコミュニケーションのために話し手がどのように聞き手（あるいは行為の受け手）のフェイスに配慮した言語行動をとるかを説明する、発話産出に関する理論であるといえる。

また、図1に示したスーパーストラテジーの下に、ポジティブ・ポライトネスについては15種類、ネガティブ・ポライトネスには10種類、オフレコードに15種類の、より具体的な状況を説明する下位ストラテジーが示されており、分析者は、実際に分析対象にする発話をこれに当てはめて解釈することができる。おそらくその援用のしやすさもあり、これまで多くの研究がB&Lに基づいて行われてきた。B&Lはポライトネス研究において、これまでで最も強い影響力を持った理論であるといえる。

## 2.2 discursive approach によるポライトネス研究

一方で、B&L に対してはこれまで様々な角度から多種多様な批判も行われてきた<sup>3</sup>。

近年では、B&Lをはじめとするそれまでの合理主義的アプローチ（rationalistic approach）によるポライトネス研究に対し、これらは理論に当てはめて発話を解釈しようとするトップダウン式であり、規範を内包するものだとして批判を行うポストモダンの言説的アプローチ（postmodern, discursive approach）の手法をとる研究方法が興隆してきている。これは、Eelen（2001）や Watts（1992, 2003）などに代表される、Broudieu などの社会理論を援用したアプローチで、実際の会話の分析を通して実証的かつボトムアップ的に理論を構築していこうとする姿勢を取る。例えば、学校で後輩が先輩に対してペンを

かりたいと思ったときに、「ペンを貸してもらえませんか」と頼む場面を考えたい。B&Lではこのペンをかりるという行為は「依頼」であり、後輩から先輩への依頼という「力関係」も考慮し、「話し手（後輩）は聞き手（先輩）のネガティブ・フェイスへの配慮に基づくネガティブ・ポライトネス・ストラテジーを用いてこのような依頼表現を産出した」と分析されるが、discursive approachでは、「後輩から先輩への依頼場面では、このような表現を用いることは『普通』であり、会話参加者らはそれがポライトな表現であるとは感じていない」という実際の人びとの認識を重視するのである。

Eelen (2001) は、それまでのポライトネスに関する主要な研究 (Lakoff, B&L, Leech, Gu, Ide, Blum-Kulka, Fraser and Nolen, Janney and Arndt, Watts) を挙げ、それぞれの理論の特徴を概観した。それによると、それまでの多くのポライトネス研究では、一般的な感覚としての「ポライトネス」 (politeness1) と専門用語としての「ポライトネス」 (politeness2) が混同されているという。また、どの研究も結局は話し手が円滑なコミュニケーションを目指すものとして捉えられていて、聞き手の立場については考察されていないとの批判も行っている。Eelen は、現代の合理主義に基づくポライトネス理論やアプローチの多くが陥っている「3つの概念上の偏向 (triple conceptual bias)」として、次の3点を挙げている。

- ・ towards the polite side of the polite-impolite distinction
- ・ towards the speaker in the interactional dyad
- ・ towards the production of behavior rather than its evaluation

(Eelen, 2001: 119)

Watts (2003) も同様に、ポライトネスの規範性を歴史的に考察し、ポライトネス研究の概念としてのポライトネス (second-order politeness, politeness2) とは別に、一般の人々の日常的な言語行動に見られるポライトネス (first-order politeness, politeness1) についての研究がなされるべきであると主張する。Watts (2003) は、politenessとは別に、politic behaviour という概念を提唱し、以下のように定義している。

#### Politic behavior

linguistic behaviour which is perceived to be appropriate to the social constraints of the ongoing interaction, i. e. as non salient, should be called *politic behavior*.

(Watts, 2003: 19)

このように、Watts は *politic behaviour* を、社会的規範によって守られていて当然の言語行動と定義し、(im) *politeness* はそこからの逸脱によって、会話参加者に (im) *polite* と認知される行動であると捉えている。これにより、研究者がある特定の発話について理論に当てはめて *polite* だと判断するのではなく、一般の人々が *polite* だと感じることにについて研究がなされるべきだと主張する。Mills (2003) もまた、研究者が独自の判断で既存の理論的枠組みに則って会話を分析することの危険性を指摘し、実際の会話参加者の認識を分析対象とするために、会話記録後のフォローアップ・インタビューの重要性を主張している。

これらの *discursive approach* によるポライトネス研究の中から、これまでは「ポライトネスの失敗」として捉えられてきた「インポライトネス」についても、それ自体として対人関係に関わるもの、あるいは方略的に用いられるものとして、ポライトネスと関連づけて積極的に研究が行われるようになってきた (Culpeper, 2005; Bousfield, 2008 等)。B&L の理論では、既に述べたように、円滑なコミュニケーションを目指すために話し手がどのようなストラテジーを (意識的・無意識的にかかわらず) 選択するかに主眼が置かれており、つまり聞き手のフェイスに対して話し手がどのように配慮行動を示すか (あるいは FTA となりうる行動自体を表明しないか) が前提とされている。しかし、このように、インポライトネス場面も含めた対人関係構築に関する言語・非言語行動を包括的に捉えるためには、相互行為の根底にあるフェイスの捉え方自体を再考する必要があると筆者は考える。本稿では、今後 *discursive approach* による実際の相互行為分析を行うために再考する必要があるいくつかの問題の中から、インポライトネス場面も含めた対人配慮行動の基となるフェイス概念について、従来の B&L の枠組みに対し検討を行いたい。

### 3. B&L のフェイス概念とその問題点

上述したように、B&L のポライトネス理論の鍵概念となるフェイス概念は、Goffman (1967) のフェイスを基に「発展」させたものである。

本章では、Goffman、B&L がそれぞれ用いるフェイス概念について概観した後、実際の相互行為分析の際に問題となる点を指摘したい。

#### 3.1 Goffman (1967) のフェイス概念

Goffman (1967) は、人は、対面での社会的な出会いにおいて、「ライン (line)」と呼ばれるものに沿って行動すると述べている。ラインとは、ある行為の型によって、自分自身の状況や、自分やその場にいる人たちについての評価を表現するものであるという。また、「フェイス (face)<sup>4</sup>」は、“The term *face* may be defined as the positive social value a

person effectively claims for himself by the line other assume he has taken during a particular contact” (Goffman, 1967; 5)、つまり特定のラインにそって自分自身が欲する積極的な社会的価値であると定義され、“image of self” (自分に関するイメージ) であるとされている。そしてフェイスは聖なるものであり、そのために人は皆それぞれ不可侵な神聖性を持っていると捉えられている。フェイスは感情と結びついており、フェイスを保ったり、失ったりすることで「いい気分」になったり「いやな気分」になったりする (Goffman, 1967; 6)。また、フェイス、つまり自己イメージは、人が持つ様々な社会的な役割や場面に応じて期待されているものであるとされている。

人は、自分自身が相互行為に値する人間であるということを相手に示さなければならないので、自尊心を持つこと (自己のフェイスを保持すること) が期待されている。同時にまた、「その場にいる他人たちの感情を大切にし面目をたててやるために、一定程度のことをすることを期待され、しかも、他人たちとの、他人たちの感情との、情緒的一体感に促されて、意識的にも無意識にもそれをするのを期待される」 (ゴッフマン, 2002: 11) と述べられているように、自分のフェイスとその場にいる人たちのフェイスの両方を立てるように行動する傾向があるものであるとされている。

Goffman は、このようなフェイスに基づく相互行為儀礼を、「表敬 (deference)」と「品行 (demeanor)」から成るものとしている。「表敬」とは、他者に敬意を表す、つまり他者のフェイスの保持を志向するものである。これは他者に対する配慮の表れであり、他者のフェイスを「保護 (protection)」するものである。「表敬」はさらに、「回避儀礼 (avoidance rituals)」と「呈示的儀礼 (presentational rituals)」に分けられる。「回避儀礼」は「何がなされるべきでないか」によって行為を規定するものであり、「呈示的儀礼」は「何がなされるべきか」によって行為を規定するものであると説明されている。

一方の「品行」とは、品行を示すこと、つまり自己のフェイスの保持を志向するものであり、「防衛 (defense)」や「自尊心」に関連している。Goffman の「品行」は、“immediate presence that he is a person of certain desirable or undesirable qualities” (Goffman, 1967: 77) (その場にいる人たちに対して、自分がまわりから見て望ましい性質をもっている人間であること、あるいは望ましくない性質をもった人間であること、を表現すること<sup>5</sup> (ゴッフマン, 2002: 78)) であるとされており、「良い品行こそは行為者としてぜひ必要とされるものである。コミュニケーションのための用意ができて相互行為者としての自分を保持し、他人たちがその人を相手に相互行為を行う立場に自分を置いても、他人たちが危険に陥らないようにその人が行為するために、信頼される人間に自分になってゆくべきなら、良い品行はぜひ必要になるわけである」 (ゴッフマン, 2002: 77) と述べられている。このように、Goffman は相互行為の中で「自己」を捉えているといえる。



つまり、人は自分で自分の属性を作ることができず、良い品行を示すことにより、他者の目を通して自己のイメージを作るものと考えられているといえるだろう。滝浦（2005）はこの点に関し、「自己イメージさえもが他者との相互作用の中で作られてくるような徹底した相互性は、ゴフマンにおいてたしかに際立っている」（滝浦，2005: 130）と述べている。

### 3.2 B&L (1987) のフェイス概念

B&LはGoffmanのフェイス概念を基本的には踏襲しているものといえるが、Goffmanでは抽象的にしか捉えられていなかったフェイス概念を、個人の欲求として捉え直し、「全ての理性ある人間が持っている欲求」また「会話の際には人々が配慮すべきもの」として、実際の会話で起こりうる言語的ストラテジーを具体的に挙げている。

B&Lでは、フェイスは以下のように定義されている。

negative face: the want of every 'competent adult member' that his action be unimpeded by others.

positive face: the want of every member that his wants be desirable to at least some others.

(B&L, 1987: 62)

そして、人々は相互行為の際には、これらのフェイスを侵害したり傷つけたりすることのないよう、ある発話のFTA度合いを見積もり、FTAを予め適切な程度にまで下げるストラテジーを駆使しているというのが、B&Lのフェイスワークの大まかな枠組みである。

しかし林（2005）は、「Goffmanのいうフェイスは、B&Lのように個人が自分の願望に基づき主体的に作り上げるものではなく、社会での位置づけや役割と密接につながったものを指す」（林，2005: 202）と述べ、B&Lのフェイスの捉え方には社会性という側面が欠けていることを指摘している<sup>6</sup>。Goffmanがフェイスを相互作用の中で、役割に応じて変化する自己イメージであると捉えているのに対し、B&Lは、フェイスを、人が普遍的に持っている固定的・限定的な欲求であると捉えているといえることができるだろう。

一方滝浦（2005）は、B&Lのポライトネス理論は人間関係の「距離」についての理論であると述べている。つまり、ネガティブ・フェイス、ポジティブ・フェイスのそれぞれについて、「距離を大きくすることは“侵さない”こと」であり、「距離を小さくすることは“通じ合う”こと」であるという。これはGoffmanの「表敬」のそれぞれ「回避儀礼」「呈示的儀礼」に対応するものであると考えられることができるだろう。しかし他方、「品行」の観点については、B&Lはフェイスを個人の持つ欲求と捉え直したために、他者の目を通し

て自己イメージを実現するという、フェイスの社会的・相互作用の側面について十分に考察がなされていないものといえる。

### 3.3 相互行為分析のための問題点

#### 3.3.1 「円滑なコミュニケーション」という前提

これまでも述べてきたように、discursive approach によるポライトネス研究では、一般の人々・実際に会話を行う会話参加者らの認識としてのポライトネスに重点を置いている。実際の相互行為では、Watts (2003) のいうように、これまで「ポライトネス」として扱われてきた言語行動の中には、社会的規範として守られていて当たり前で、会話参加者らにはポライトだと感じられていないものも多い。また、時には話し手がポライトなつもりで行った発話が、聞き手にとっては FTA と感じられたり、話し手が意図的に FTA を表明しようとするケースもあるだろう。

次に示す例は、実際の夫婦間会話を記録したものである。この場面では、自分たちの子どもの進学先をめぐる夫婦間で意見の対立が起こっている。自分自身が私立中学出身の妻は、大学進学のことを考えて息子も私立に進学させたいと考えているが、一方の夫は公立中学出身者で、地元の友人がたくさんできるという理由から、自分の息子も公立中学に進学させることを主張している。

#### 【談話例 1】夫婦間会話

1 妻：でも私立やからって友達できひんわけちゃうやん、あたしもいっぱい友達おるって

2 夫：でもお前地元の友達おらんやん

3 妻：=でもあんたより大学のレベル高いやん

4 (0.4)

5 夫：お前 [おんま] 結局事務やんけ、営業職行ってばりばり働いてみろや

《声：大・語調：強い》

6 妻：あたしは女やから事務で行ってんやん、それはあたしの選択の問題

7 (1.8)

8 夫：ふーん

フォローアップ・インタビューによると、2 で夫は、妻に友人自体が少ないと言いたかったわけではなく、「地元の」を強調したつもりだったという。つまり、夫には妻に対する FTA の意図はなかったものと考えられる。しかし妻には「友達おらんやん」がフォーカスされて受け取られ、妻は続く 3 で報復的かつ意図的に、夫の学歴が自分より低いことを



指摘し、FTA を行っているものといえる。夫よりも妻の学歴が高いことは、この夫婦の間でタブーとなっているという（フォローアップ・インタビューより）。妻は、自らが被ったフェイスへの侵害に対し、報復的にFTA を行い相手のフェイスを同等、あるいはそれ以上に侵害することによって、自らのフェイスを相対的に高めようとしていると考えられるのである。同様のことが5の夫にも見られる。タブー視している学歴に関するFTA を受けた夫は、ここで言語表現・韻律共に攻撃的になり、妻に対しより大きなFTA を行おうと意図しているものといえるだろう。

Goffman (1967; ゴッフマン, 2002) は基本的には円滑なコミュニケーションを前提として論を進めているが、一方でフェイスを侵害する状況についても言及している。Goffman は、“threat to face” について、多くの社会において、自分自身の行動によって相手のフェイスを脅かした場合にとらなければならない責任は、以下の3つに分けることができるとしている。

1. 悪意なくやったと思われる場合

しらない内に行っていた侮辱で、もしそれが侮辱に当たると分かっていたら、その人はそんな侮辱は行わないだろうと侮辱を与えられた人が知覚する場合

2. はっきり相手に対して攻撃的な悪意をもって侮辱した場合

3. 事故的な侮辱

悪意はないけれど、侮辱の結果について無頓着であったために侮辱になってしまう場合

(ゴッフマン, 2002: 14)

このように、Goffman は相手のフェイスに対する侵害が起こることを視野に入れており、「悪意」を問題にしていることから、“threat to face” を意図に関連する問題と捉えていることがわかる。しかし Chang and Haugh (2011) は、“the notion of face threat is arguably theoretical in origin, differing from the notion of maintaining, losing, saving and giving face” (2949) と述べ、Goffman が“face threat” をどのように捉えていたのか、またどのように捉えるべきなのかについては議論の余地が残っていると述べている。また、このようなフェイスへの脅威がなぜ起こるのか、また起こった場合には、続く相互行為にどのような影響を与えるのかについては考察が行われていないといえるだろう。

一方 B&L のポライトネス理論も、相互行為の際に話し手がいかに聞き手のフェイスを

保持するためにストラテジーを駆使するかということに主眼を置いており、モデルパーソンを基に展開する、話し手・聞き手双方のフェイスを同時に満たすような「円滑なコミュニケーション」を前提として成立しているといえる。しかし、B&Lも Goffman と同様、「潜在的な FTA」<sup>7</sup>として、聞き手のフェイスへの脅威と話し手のフェイスへの脅威とが対立する場合の例を、話し手のネガティブ・フェイスを脅かす行為とポジティブ・フェイスを脅かす行為とに分けて触れている<sup>8</sup>。B&Lは、発話を行う際には次の3要素の相対的な重みを考慮することになると述べている。

- (a) the want to communicate the content of the FTAx
- (b) the want to be efficient or urgent
- (c) the want to maintain H's face to any degree

(B&L, 1987: 68)

しかし、B&Lがここで問題にするのは、Griceの協調の原理に基づいた(b)と、(c)とのバランスの問題で、(a)の、話し手自身のFTAxの内容を伝えたいという欲求は、具体的に話し手自身のフェイスとの関連を検証されることなく放置されている。そして発話産出の際の話し手自身のフェイスについて言及されているのはこの部分だけで、その後の具体的な詳細なストラテジー記述の際には、(a)の観点はほとんど反映されていないといってよい。また、インポライトネス研究では多くの場合、FTAを意図的に行う場合をインポライトネスと定義しているが、Goffmanの“threat to face”が悪意を問題にしている意図に関連付けられているのは異なり、B&Lの場合は(a)に関して「FTAxの内容を伝えたい」ことを問題としているだけで、「相手のフェイスを侵害したい」という観点については考慮に入れられていないといえる。談話例1のケースでは、(c)のように、聞き手のフェイスをある程度保持しようとしている姿勢は見られず、自らのフェイスを相対的に高めるために、相手フェイスを意図的に大きく侵害しようとしているが、B&Lの捉え方ではこのようなフェイスワークを分析することができないだろう。

このように、実際の相互行為では起こり得る、誤解による、あるいは意図的な、相手へのFTAを分析するためには、話し手・聞き手双方のフェイスは常に両立させるべきものとし、円滑なコミュニケーションを前提としているB&Lのフェイスの枠組みでは捉えきれない場合があるといえるのである。

### 3.3.2 フェイスのもつ「自己イメージ」の側面

次に、B&L では検討されていない、フェイスのもつ対人距離欲求以外の側面について考えたい。

Goffman は、フェイスは感情に関連するものだと述べているが、相互行為全体を研究の対象とし、Eelen (2001) の指摘するように「聞き手の視点」、つまり話し手の発話に対する聞き手の受け取り方を考慮に入れる場合、前述したように、話し手がポライトなつもりで行った発話が聞き手にとっては不快に感じられ、FTA となる場合がある。このことは、非常に繊細で多分の配慮を必要とする相手のフェイスの欲求を、話し手が読み違えた結果起こるものだと考えられる。

B&L のフェイス概念を、滝浦 (2005) のいうように人間関係の距離に関するものと捉えると、FTA が起こるのは、「相手と親密になりたい」あるいは「相手から自分の領域に踏み込まれたくない」という対人的な距離の欲求が、望んだレベルで満たされなかった場合であると捉えることができるが、感情と結びついたフェイスの要求というのは果たして、対人関係における距離に関するものだけなのだろうか。

Spencer-Oatey (2000) は、フェイスが普遍性を持つ概念であることには同意しているものの、「フェイスは、人々が直感的にその意義を認める概念だが、それを厳密に定義することは困難である」(Spencer-Oatey, 2000: 12) と述べている。彼女は Ting-Tommy and Kurogi (1988) を参照し、フェイスは「人の価値観、尊厳の意識、及び自己認識にかかわるものであり、尊敬、名誉、身分、評判、能力等の問題と関連する」ものであると述べ、フェイスをアイデンティティ・自己イメージに関わるものであるとしている (Spencer-Oatey, 2000: 12)。

彼女は、ポライトネス (ラポール・マネジメント<sup>9</sup>) におけるフェイスの捉え方について、多くの考察を行っている。Spencer-Oatey (2007) は、Goffman の「フェイス」と、「アイデンティティ」の心理学的概念が非常に似通っていると指摘し<sup>10</sup>、しかし B&L が 2 種類に分けたフェイス理論の影響が非常に強かったために、言語学者はこの点を見落としてきていると述べて、アイデンティティの問題を考える必要性を主張している (Spencer-Oatey, 2007: 643)。

Spencer-Oatey (2007) は、フェイスの捉え方 (アイデンティティ、「肯定的な自己像」) について、イギリスの小学生の例を挙げ、以下のような考察を行っている。

…many secondary school children in England feel they will lose face among their peers if they appear to be too clever and/or studious, because they value the attribute ‘cool’ more highly than clever or hardworking.

(Spencer-Oatey, 2007: 644)

一般的には肯定的評価を受けるような「優秀さ」や「勤勉さ」よりも、「クール」であることのほうが、彼らにとっては高い価値を持つと捉えられているという。Spencer-Oatey は、肯定的な自己イメージというものは、人によって異なる価値付けがなされるものであり、感情的な評価と結びついているものであるとしている。

このように、ある人にとっては否定的に評価されることであっても、別の人にはそうではないかもしれないし、また一般的には否定的に評価されているものが、人や状況によっては反対に肯定的に受け取られる場合もあると考えられるのである。

同様に、ポライトネス理論における自己イメージやアイデンティティについて、Tracy (1990) は、気持ちの良い人間であることや、好ましい人間であることだけでなく、有能である、信頼に値する、威圧的である、強い、理性的であるなどの様々に見せたい要求があるのではないかと述べ、ポライトネス理論はこのようなものも含むことができるよう拡張されるべきだとしている。特に、談話例1のような夫婦間会話においては、B&Lの人間関係の距離としてのフェイスの捉え方での分析は困難である。Goffman (1986) は、親しい間柄というのは、心理的な距離が近く、相手の領域に踏み込むのに危惧する必要がない状態であるとしているが、これに従うと、夫婦は相手の領域や自己の領域について、互いに最も配慮の必要ない人間関係の一つであり、フェイスワークについては対人距離とは異なる側面におけるフェイスに重点が置かれる場合が多いと考えることができるだろう。

このように、多種多様な現実の日常会話で行われる複雑なフェイス欲求を説明するためには、B&Lのポジティブ、ネガティブというフェイスの二分法では不十分であるといえる。ところで、B&Lはフェイスに関するアイデンティティ・自己イメージの問題について以下のように述べている。

- (a) negative face: the basic claim to territories, personal preserves, rights to non-distraction – i. e. to freedom of action and freedom from imposition
- (b) positive face: the positive consistent self-image or 'personality' (crucially including the desire that this self-image be appreciated and approved of) claimed by interactants

(B&L, 1987: 61, 強調筆者)

B&Lがポジティブ・フェイスの説明の中で述べている自己イメージは、相互行為上相手から求められる「一貫したもの (consistent)」とされているが、上で見てきたように、人や状況によって理解されたい自己イメージは様々に異なる。「相互行為上望ましいイメー

ジ」というのは、おそらく社会的に求められているものを指すが、実際の個人間の相互行為においては Tracy (1990) のいうように、「威圧的である」「強い」など、必ずしも相手から「好ましい人間」であると思われるわけではない自己イメージを前面に出したいと望む場合も考えられる。

このように、相互行為を分析するにあたって、フェイスは B&L で扱われているような「接近と離反」という相互行為上の人間関係についての距離の問題としてだけではなく、複雑で繊細なアイデンティティや自己イメージの問題も含むものと考えなければならないだろう。

#### 4. フェイス再考

ここでは、前章で述べた B&L および Goffman によるフェイス概念の捉え方・フェイスワークの枠組みの問題点をもとに、実際の相互行為を分析する際に有用なフェイスの枠組みを模索したい。

##### 4.1 自己イメージのフェイスと対人距離のフェイス

前章でも述べたように、B&L のポライトネス理論におけるフェイスの捉え方には、場面や状況によって異なる、多様な自己イメージを表現したい、またそれを理解されたいという要求があることを考慮に入れていないという問題がある。フェイスには B&L のような対人関係の距離に関わるものに加え、自己イメージを表示したいという側面があることを考えなければならないだろう。

フェイスの捉え方に関する提案は、これまでも多くの研究者によってなされてきた。例えば前述の Spencer-Oatey (2000) は、「フェイス」ではなくより相互行為分析に適したものであるという「ラポール」という概念を用い、これを詳しく分類して提示している。しかし、本稿および長期的な筆者の目的は、どのようなフェイスの側面に基づいて各々の発話が産出されているのかを明らかにすることではなく、ポライトネス／インポライトネスの諸相を考える際の分析の枠組みとしてフェイスを捉えることであるため、Spencer-Oatey のような詳細なフェイスの分類・規定は実際の相互行為を考える上でむしろ分析を困難にするものであるように思われる。従って、ここでは、機能的・概念的な側面から、以下のようにフェイスには二つの側面があると考えたい。すなわち、「自己イメージのフェイス」と「対人距離のフェイス」である。

**自己イメージのフェイス**：自分自身に関する特定のイメージ、アイデンティティを示したい、理解されたいという要求をもつフェイス

**対人距離のフェイス**：対人関係における相手との距離に関連するフェイス

以下の談話例 2 は、大阪府在住の女子高校生の友人同士の会話を記録したものである。この場面では、A が誕生日に恋人にプレゼントをもらったという話をしている。

【談話例 2】 女子高校生・友人間会話

1A：こないださあ

2B：= おん

3A：○○（A の恋人の名前）がさあ

4B：おん

5A：なんか、ネックレスくれた

6B：えーいいやん、なんでなんで、なん、誕生日プレゼント？

7A：そおー／／ー

8B：えーいいやんいいやんー、えどんなんどんなん？

9A：なんかー

10 (1.0)

11A：いや、ティファニー、や／／ねん、けどー

12B：えーめーっちゃいいやんー、めっちゃ高いんちゃ／／うん

13A：高い高い、一番安いやつ／／やってー

14B：えーいいなー

フォローアップ・インタビューで、A は、恋人からネックレスをもらったことが嬉しく、またそれが高級ブランドとされるティファニー社のものであったことがさらに嬉しかったため、B に聞いてもらいたかったと話している。しかし、この話を B にすることは「自慢」にあたると言えるだろう。自慢は、フェイスの対人距離的側面に焦点を当てた B&L のポライトネス理論では、相手よりも自分を上に位置づける行為であり、FTA にあたるものと分析されている。しかし、この場面で A が自慢話をしたのは、相手よりも自分を上位に位置づけたいという欲求を持ったわけではなく、素敵な恋人がおり、高価なプレゼントをもらうほど大切にされているのだというような自己イメージを表明する欲求を持っているからであると考えられる。

B&L のポジティブ／ネガティブというフェイスの二分法には様々な批判があるが、これ

を滝浦（2005）のいうように人間関係の距離のとり方に関する二分法と捉えると、「接近」と「離反」として、対人距離に関する欲求を説明することが可能だろう。一方の自己イメージのフェイスについては、必ずしも社会的に求められる相互行為上の「良い人」という側面を表示したい場合ばかりではないため、場合によっては自己イメージのフェイスの中でどのような自己イメージの側面を前面に出すかについての葛藤が起こるだろう。

Mead（1924; ミード, 1991）は人間の「自我」に関する論の中で、人間の自我は生まれたときから備わっているものではなく、絶えず変化する社会や他者からの影響により、自分が他者からどんな社会的役割を求められているかを認識してそれを規範として徐々に構築されていくものと述べている。ミードはこのような自我の側面に、「Me」という語をあてている。一方、社会や他者からの影響を受けてばかりではなく、個人は独自の内発的自我も持っている。この側面を「I」と呼ぶ。つまり、社会的に求められ、規範となっている「Me」と、個人の個性としての「I」とが対立し、つりあいを探りながらバランスを取ることによって「社会的自我」が形成されていくというのである。

このような社会的に付与された役割による規範と、個人の内発的自我としての個性の対立という観点は、社会的自我そのものの形成に関してだけではなく、日常生活における個々の相互行為場面を考える上でも有効だろう。社会的に求められた「相互行為に値する人間」として、相手に対するFTAを極力避け、相手のフェイスに配慮を行うことを重視する側面と、それとは相反することのある自分自身の個性の主張をしたいという側面とがせめぎ合い、それによって決定される態度が、当該発話、あるいは一連の相互行為における発話や態度の1つの要因になっていると考えることができるのである。談話例2でも、Aは自己イメージとして自慢話の内容を表明したいという欲求を持っている一方で、間やフィルターなどを用いて「進んで自慢しているわけではない」ということを表明したり、12のBの賞賛に対して13で「高くない」「一番安いもの」と付け加えたりしてBのフェイスへの補償を行っているといえる。

また、対人距離のフェイスには、「親疎」のほかに、「上下」もあると考えたい。相手との関係で「上下」を意識することは、社会的地位などと関連していない場合、時にはFTAとなる可能性を孕んでいる。また、自己イメージのフェイスは、社会的規範に則った「相互行為に値する良い人間」であるという社会的側面と、ミードの言うような「I」、つまり社会的規範とは対立する場合のある、ある程度独立的な側面があるように思われる。

そして、このような自己イメージ・対人距離という二つのフェイスは互いに分離して考えることはできないだろう。相手との距離を多く取ることによって、近寄り難い人という評価を受けることがあるし、近寄り難い人というイメージを前面に出すことによって、相



手が自分の対人距離のフェイス欲求について見積もる手掛かりを与えることになるのである。このように、相手との距離の取り方とその人の社会的イメージとは密接に関連しているということができよう。

## 4.2 フェイス比重

それぞれに自己イメージのフェイスと対人距離のフェイスを持った個人同士が相互行為を行うとき、そこでは互いの思惑が様々に行き交い、複雑なフェイスワークが行われていると考えられる。Spencer-Oatey (2007) が述べているように、コミュニケーションにおいては、相手がフェイスのどのような側面を出したかについての繊細な判断が必要となる。しかし、実際の相互行為では、自己イメージ・対人距離双方のフェイスに関して、話し手の考える相手のフェイス欲求と、話し手自身のフェイス欲求との対立が起こる場合があると思われる。

### 4.2.1 フェイスの対立

#### ●「相手フェイス」と「自己フェイス」との対立

まず対人距離のフェイスに関していうと、自分の対人距離のフェイス欲求と相手の対人距離のフェイス欲求とが対立する場合が考えられるだろう。つまり、自分と相手との、距離をどの程度取りたいか（あるいは取るべきか）についての欲求が合致しないという場合である。自分は相手とは親しくなりたいと望んでいないにもかかわらず、相手のほうはこちらとの距離を縮めたいという欲求を持っているように思われる場合などが挙げられる。また、自己イメージのフェイスについては、相手から求められている自己イメージを示すことによって「相互行為に値する人間」であることを示したい、または示すべきであるという社会的規範に則ったイメージを相手から持ってほしいという欲求とともに、それとは相反する自己イメージを呈示したいという欲求を持つこともあるだろう。

Goffman は、「人が他人たちの面目（フェイス）を保ってあげたいと思うのは、その人が他人たちの心象に感情的に執着しているから、面目（フェイス）を保ってもらふ道義的権利を他人たちがもっているとその人が思っているから、他人たちが面目（フェイス）をつぶした場合に自分に向けられるかもしれない敵意をその人が避けたいから、である」（ゴッフマン、2002: 12）と述べているように、フェイスワークに関して他者のフェイス保持の目的は自己のフェイスの保持であるという、より「自己中心的」ともいえる視点を持っている。Goffman の意味する相互作用上のフェイスワークとは、他者のフェイスに配慮するのは究極的には自分が「良い人」と思われたいためであり、他者に対する「思いやり」、あるいは純粹に円滑なコミュニケーションのための欲求から生まれるものではないと

捉えることができる。

Klein (1994) は、ポライトネスは、表面上相手の欲求や望みを満たすためのものに見えるが、実際にはそれは2つ目の役割で、本当は自己への関心がずっと強いために行うものだと述べ、Watts (2003) も、他人に対するポライトな表現は、相手への思いやりに見せかけて、実は自分のために用いるものだと述べている。同様に、Sifianou (1992) もまた、諸研究者によるポライトネス理論を概観し、人が他人に思いやり深く接するのは、見返りで自分が気分良くなるためであり、そうすることで人からお返しに親切にしてもらい、かつ相手の要求を満たすこともできるからであるとしている。

このことから、人は、究極的には自己のフェイスを何らかの形で保持しようとする、少なからず自己中心的な存在であると考えられることができるだろう。従って、状況によっては、談話例1のFTAの応酬に見られるように、自分と相手とのフェイスを両立できず、相手のフェイス欲求を保持しようとするよりも、自己のフェイス欲求を保持しようとする場合があるということも視野に入れなければならない。

### ●自己フェイスの中の「社会的自己イメージのフェイス」と「個人的自己イメージのフェイス」との対立

談話例2で見たように、自慢話は相手よりも自分を高く位置づける行為であるとして、B&Lでは潜在的にFTAであるとされている。しかし、実際の相互行為を考えると分かるように、言うべきではないと分かっているにもかかわらず、つい自慢話をしてしまうなどという場合もあるだろう。自慢話は、「依頼」や「断り」などの状況的要素に依存することが多い場面とは異なり、自己イメージの表出の欲求に関わりが深いものと考えられる。

従って、仮に、B&LではFTA度合いが最も高いと見積もった場合に選択するとされている「Don't do the FTA (FTAとなる行為自体を行わない)」という戦略を選択するのが適切な場面だと話し手が考えたとしても、他の補償戦略などを用いながらも「適切ではない」自慢話をしてしまう場合があるのではないだろうか。この場合、おそらく話し手は、発話産出の過程で、自慢話をしないことで相手から「(何らかの程度で)不適切な人間」というマイナスの評価を受けることよりも、自慢話の内容を通して相手に理解されたい、知ってもらいたい自己イメージがある、あるいは対人距離のフェイスの側面で相手より上位に立ちたいといった欲求に比重を置いたものと考えられるのである。自己イメージの社会的側面と個人的側面とを秤にかけ、実際の言語・非言語行動を決定しているものといえるだろう。

このように、実際の相互行為においては、密接に関わり合う自己と他者のフェイス、また自分の中の自己イメージのフェイスと対人距離のフェイスとの比重を考え、状況に応じ

てどのフェイスにどの程度の比重を置くか、どのフェイスを犠牲にし、どのフェイスを優先すべきか／したいかなどについての、複雑な駆け引き・バランスによって言語行動や態度を意識的・無意識的に選択していると考えられる。

#### 4.2.2 ストラテジー選択の要素

もちろん、実際の相互行為を考えるためには、これまで述べてきたような互いのフェイスに関するやりとりは、全てが状況・文脈によって変化すると考えなければならない。また、実際の相互行為においては、一発話だけではなく一連の相互行為の流れ、あるいは共有の前提知識などを考える必要がある。相手の発話が非意図的であるにせよ、自分にとってFTAと感じられたときには、報復的に相手のフェイスを侵害したいという欲求が起こり、その欲求と、「良い人でありたい」という社会的規範との対立が自己の中で起こるだろう。三牧（2008）では、初対面大学生間の1対1の会話を分析し、ディスコースレベルで見ると、会話参加者間のFTAの質と量が同等に行われていたことが観察されている。つまり、FTAが意図的・非意図的にかかわらず一方から行われると、それを原因として新たなFTAが引き起こされると考えることができる。このことは、話し手の、自己のフェイスを保持したいという欲求のあらわれであると同時に、ディスコースレベルでの分析を行わなければその実践の場で実際に何が行われているのかを判断することができないということを意味している。談話例1では、誤解から始まる激しいFTAの応酬が観察されており、互いに自分が受けたFTAよりもより大きい度合いのFTAを相手に行うことで相対的に自己フェイスを高めようとしている様子が観察される。しかし、このFTA場面以前に、そもそも子どもの進学に関する話題自体で夫婦間の意見の対立が起こっている。B&Lでは、意見の対立は本質的にFTAであると分析されているが、フォローアップ・インタビューによると、彼らはこれまでもこの話題で何度も話し合っており、互いの意見が対立することは分かっているという。そして、それでも互いが子どもの将来的な利益という共通の目標をもってより良い選択を行おうとする上での対立なので、この話題においては互いの意見が対立し、相手の意見に反駁し合うこと自体は不快に感じてはいないと述べている。つまり、この状況での対立フレームそれ自体はFTAとは認識されていないと考えることができるだろう。このような会話参加者らが共有している前提自体も、フェイスワークや実際のストラテジー選択には大きな影響を与えているものと考えられる。

また、談話例1のように、相手のフェイスを侵害したいという欲求を持ったとしても、これまで述べてきたフェイスに関するやりとり、及びB&Lの示したFTA度合いの見積もり公式の要素である相手との相対的権力や社会的距離などが、相手のフェイスを侵害したいという欲求をどの程度表面化させるか（言語・非言語情報として表出させるか）に大き

な影響を与えるものと思われる。B&Lは、FT自体を相手に対して行いたいという欲求を考慮に入れてはいないが、実際の相互行為分析においてはこのような要素も考えるべきだろう。

そして、社会的規範や上述したような個人間会話に関わる様々な要素を、自分の頭の中で天秤にかけた上で最終的に行った行為というのは、Goffmanの「品行」で言われているように、話し手の自己イメージに関連する社会的評価として自分に返ってくると考えられるのである。

## 5. おわりに

B&Lのポライトネス理論は、話し手が聞き手のフェイスに配慮してどのような言語行動を選択しているかという、主として発話産出に関する理論であるが、近年の相互行為を問題にし、実際にその場で何が行われているかを分析することを目的とする研究においては、従来のように単純に既成の理論を適用するということができなくなった。B&Lでは、聞き手のフェイスに重点が置かれ、話し手自身のフェイスの問題は、「聞き手のフェイスを尊重することで両立できる」ものと捉えられてきたが、必ずしも常に円滑に進行するわけではない実際の相互行為を分析するためには、多様なフェイス欲求が対立する場面も考える必要があるといえるだろう。

実際の相互行為では、人は必ずしも「社会的に適切な」言語行動・態度を取るわけではない。円滑なコミュニケーションを目指すことを前提とするよりも、個と個の交わる相互行為の場では、互いが相手の欲求と自己の欲求、および自分の中の相反する二つの欲求との比重を考え、実際の戦略を選択していると考えられる。つまりこれまであまりにも話し手の発話の際、聞き手のフェイス保持にばかり傾けられてきた関心を、話し手自身のフェイスを考慮することにも同等に分配し、相互行為が進行するという観点を持つべきではないだろうか。

このことにより、これからのポライトネス研究はフェイスワークに基づいて、インポライトネスを含めた実践コミュニティの姿をより詳細に、正確に記述・研究することができるのではないかとと思われる。今後は、このような観点に基づいて様々な実践コミュニティの姿を実証的に検証し、実際の相互行為を分析することのできるポライトネス理論の新たな枠組みについて検討を重ねたいと考えている。

## 注

- 1 Sは「話し手 (Speaker)」、Hは「聞き手 (Hearer)」を表す。
- 2 筆者訳。以下、特に注記しない場合は筆者訳とする。
- 3 フェイスの普遍性に対する疑問、D、P、Rの要素の検討が不十分であるとの批判、社会的規範による言語選択が考慮に入れられていないという指摘など。
- 4 ゴッフマン (2002) では、“face”を「面子」、「line」を「方針」と訳しているが、日本語における一般用語としての「面子」や「方針」の解釈とは異なる概念であるため、ここではその一般的意味を想起しにくいよう、原文 (Goffman, 1967) の“face”、“line”を「フェイス」、「ライン」とカタカナ表記で記述することにする。
- 5 Lim (1994: 210) は、フェイスに対する欲求について、否定的に捉えている物事に対して、フェイスを持つことはないと述べ、フェイスが肯定的価値を持つものであることを確認している。
- 6 このような「社会的役割・規範」と「個人の欲求」という観点からの批判は、ポライトネス研究において主にアジアの研究者らによって繰り返し述べられてきたことである (Ide, 1989 等)。
- 7 ある種の行為は本質的にフェイスを侵害するものであると捉えられているが、これは語用論的には適切な解釈ではないとされているものである。
- 8 B&Lは、話し手と聞き手とが互いのフェイス保持において協力的であることを前提として、「主にS (Speaker) のフェイスに関するFTAであっても、潜在的にはH (Hearer) のフェイスも脅かすことになる」としている。
- 9 Spencer-Oatey (2000, 2007 等) は、「ポライトネス」ではなく「ラポール・マネジメント」という概念を提案し、「ラポール」をポライトネスよりも相互行為分析に適したものであるとしているが、これも、用いている概念や用語に多少の違いはあるものの、ポライトネス研究の中のひとつと捉えることとする。
- 10 フェイスとアイデンティティは、self-imageの観点で関連しているという点、両方とも多重のself-aspectsやattributeを包含している点で同様のものとされている (スペンサー＝オーティー, 2004: 644)

## 文字化の規則

談話例の文字化の規則は次の通り。

/// : ///の後の発話が次の番号の発話と同時に発せられたことを示す。

(0.5) : ( ) の中の数字は 0.1 秒刻みで表示される、話の中で起こる沈黙の長さを示す。

(0.5) は 0.5 秒の沈黙であることを示す。

ー : 「ー」の前の音節が長く伸ばされていることを示す。「ー」の数が多いほど、長く発せられていることを示す。(「ねえ」は「え」がはっきりと発せられているのに対して、「ねー」は「ね」の音がのばされたことを示す。)

? : 疑問符ではなく、上昇イントネーションを示す。

、 : 直前のターンの中で不自然ではない、ごく短い沈黙を示す。

~~~~~ : 笑いながらなされた発話の下に記す。

= : 間がなくすぐ起こった発話であることを示す。

[ ] : 実際に聞き取れた音声を記す。

《 》 : 韻律の特徴を記す。

## 参考文献

- Bousfield, D. 2008. *Impoliteness in Interaction*. Amsterdam: John Benjamins Publishing.
- Brown, P., and Levinson, S. C. 1978. Universals in language usage: Politeness phenomena. In Goody, E. (ed.). *Questions and politeness: Strategies in social interaction*. Cambridge: Cambridge University Press. pp. 56-311.
- , 1987. *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Chang, W. M., and Haugh, M. 2011. Strategic embarrassment and face threatening in business interactions. *Journal of Pragmatics*. 43, (12), 2948-2963.
- Culpeper, J. 2005. Impoliteness and entertainment in the television quiz show: The Weakest Link. *Journal of Politeness Research: Language, Behaviour, Culture*. 1, 35-72.
- Eelen, G. 2001. *A Critique of Politeness Theories*. Manchester: St Jerome.
- Goffman, E. 1967 [1982]. *Interaction Ritual: Essays on Face Behavior*. New York: Pantheon Books.
- = 1986 [2002]. 広瀬英彦・安江孝司訳. 『儀礼としての相互行為—対面行動の社会学』東京：法政大学出版局.
- , 1986. *Frame Analysis*. Boston: Northeastern University Press.
- Ide, S. 1989. Formal forms and discernment: two neglected aspects of universals of

- linguistic politeness. *Multilingua*. 8, 223-248.
- Klein, L. 1994. *Shaftesbury and the Culture of Politeness: Moral Discourse and Cultural Politics in Early Eighteenth-Century England*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Lim, T. S. 1994. Facework and interpersonal relationships. In S. Ting-Tommey. (ed.). *The Challenge of Facework: Cross-Cultural and Interpersonal Issues*. Albany: SUNY Press. pp. 209-229.
- Mills, S. 2003. *Gender and Politeness*. Cambridge: Cambridge University Press.  
= 2006. 熊谷滋子訳. 『言語学とジェンダー論への問い—丁寧さとは何か』東京：明石書店.
- Mead, G. H. 1924. The genesis of the self control. *International Journal of Ethics*. 35, 227-251.  
=1991. 船津衛, 徳川直人訳. 『社会的自我』東京：恒星社厚生閣.
- Sifianou, M. 1992. *Politeness phenomena in England and Greece: A cross-cultural perspective*. Oxford: Clarendon.
- Spencer-Oatey, H. (ed.). 2000. *Culturally Speaking*. New York: Continuum.  
=2004. 田中典子ら訳. 『異文化理解の語用論—理論と実践—』東京：研究社.  
-----, 2007. Theories of identity and the analysis of face. *Journal of Pragmatics*. 39, 639-656.  
-----, 2011. Conceptualising 'the rational' in pragmatics: insights from metapragmatic emotion and [im] politeness comments. *Journal of pragmatics*. 43, 3565-3578.
- Spencer-Oatey, H. (ed.). 2000. *Culturally Speaking*. New York: Continuum.  
=2004. 田中典子ら訳. 『異文化理解の語用論—理論と実践—』東京：研究社.
- Ting-Tommey, S., and Krogi, A. 1998. Facework competence in intercultural conflict: an updated face-negotiation theory. *International Journal of Intercultural Relations*. 22, (2), 187-225.
- Tracy, K. 1990. The many faces of facework. In Giles, H., and Robinson, W. P. (eds.). *Handbook of Language and Social Psychology*. Chichester: Wiley. pp. 209-26.
- Watts, R. 1992. Linguistic politeness and politic verbal behaviour, Watts, R., Ide, S., and Ehlich, K. (eds.) *Politeness in language: Studies in its history, theory and practice*. Berlin and New York: Mouton de Gruyter. pp. 43-70.  
-----, 2003. *Politeness*. Cambridge: Cambridge University Press.



- 宇佐美まゆみ. 2002. 「ポライトネス理論の展開1 「ポライトネス」という概念」『言語』 31 (1), 100-105.
- 林宅男. 2005. 「「フェイス」の再考：普遍的ポライトネス理論の構築に向けて」『英米評論』 19, 191-220.
- 滝浦真人. 2005. 『日本の敬語論—ポライトネス理論からの再検討』 東京：大修館書店.
- 三牧陽子. 2008. 「会話参加者による FTA バランス探求行動」『社会言語科学』 11 (1), 125-138.